

プロジェクト名：中世ヨーロッパにおける歴史叙述の方法と客観性に関する研究

－13 世紀王国年代記における俗語使用の問題を中心に－

プロジェクト代表者：鈴木道也（教育学部・准教授）

1 はじめに

インターネットに代表される表現メディアの多様化によって、歴史家の役割あるいは歴史叙述の意味が問い直されつつある現在、報告者の問題関心は中世における歴史家と権力の関係性にある。多様な歴史認識が交錯する中世社会にあって、権力体としての国家の成長と変容は「歴史家」たちの語りをどう変えたのであろうか。また歴史叙述に携わる当時の知的エリートたちは、どのような意識と方法論をもってそれぞれの史書を組み立てていたのであろうか。

本研究では、中世の歴史家が用いた言葉、すなわち歴史記述における言語選択（ラテン語か俗語か）の問題を取り上げ、俗語フランス語（古フランス語および中世フランス語）の発展期とされる 13 世紀後半から 14 世紀前半にかけてのフランス王国で記された史書を分析の対象とした。歴史記述は時として読者（受容者）の意向を無視し、プロパガンダ的に言語を選択、発信することもあるため、当該期における全般的な言語使用状況との比較を意識して、法実務の領域（生活に密着し、また当事者間の利害に直結しているため急激な変更が困難であると思われる）における言語使用についても確認することとした。

2 俗語フランス語は王の言葉か

通説的には、王権による俗語フランス語使用が、その支配圏における俗語の浸透に貢献したとされてきた。ルイ 9 世治世の国王発給文書中にフランス語が現れると、その後フィリップ 4 世治世に俗語使用が増加し、15 世紀には一般化、その到達点が 1538 年のヴィレール＝コトレ勅令であった。そこでは王権の伸張と俗語の拡大が併行し、最終的に「王の言葉」としてのフランス語がラテン語、あるいは競合する俗語（例えばオック語）に勝利するという図式が描かれてきた。歴史記述に関しても、ルイ 9 世の指示を受けて 1274 年にサン・ドニの修道士プリマが完成させた俗語（古フランス語：フランシアン）版王国年代記、『王の物語』の存在が知られており、通説的理解を支える証左のひとつとされている。

しかし俗語フランス語の拡大は、ノルマン・コンクエスト後のイングランド、東方十字軍で建設された十字軍諸国家、「アルビジョワ十字軍」後の南フランス、シャルル＝ダンジュー進出以降の南イタリアなど、きわめて多様な場と機会を有しており、王権の主導性を評価するためには慎重な検討が求められるように思われる。

3 中世後期フランス王国の法文書に現れる俗語 -Lusignan, S. の研究から-

法文書の言語選択を分析したリュジニャンの研究によると、13 世紀半ば以降、フランス北部におけるフランス語使用の急速な拡大が確認されるが、これは主として都市当局がフランス語使用に積極的であったことによるものであった。有力諸侯に関してはシャンパーニュ伯の事例が知られているが、ここでは 13 世紀後半にフランス語使用が優勢になるものの、その後再びラテン語が優勢になり、決定的とは言えない。王権に関しても、国王発給文書はカペー朝期を通じてラテン語が優越していた。王国地方行政では、全般的な傾向として北フランスのフランス語（オイル語）/慣習法/バイイ管轄域においてはフランス語が、また南フランスのオック語/成文法/セネシャル管轄圏においてはラテン語が優越しており、その傾向はヴァロワ朝にも受けつがれている。しかしフィリップ 6 世治世にひとつの画期が見られ、国王発給文書中の俗語使用がこの時期急激に増加する。とくに恩赦状の発給に際して俗語フランス語を用いていることが確認されている。

4 中世後期フランス王国の歴史記述における俗語

他方、『王の物語』以降、黒死病が流行する1348年までのフランス王国で作成された歴史記述を整理してみると、当該期に確認される史書の約2/3は依然としてラテン語を使用している。この時期史書の制作に関わるのは圧倒的に教会・修道院であり、俗人主体のものは少数であった。内容的には、ラテン語・俗語を問わず、三層の歴史（普遍史、王国史、地域史[都市史]）のなかで、普遍史(教皇・皇帝史)と地域史を結びつけたものが多く、編纂者が所属する修道院の縁起のみを記したものも存在している。王権周辺を除けば、フランス王朝史を継続的に叙述した史書はほとんど確認されない。全体として史書編纂は活発とはいえ、複数の史書の制作を（もしくは追記という形で修史活動を）継続的にを行っている組織はサン＝ドニ修道院やリモージュのサン＝マルシャル修道院ぐらいであった。俗語史書に限定した場合、地域的にはフランス北部に集中し、14世紀半ばになるとフランス南部でも確認されるが、制作主体が不明であるものも多く、普遍年代記(世界年代記)を翻訳したかたちでの俗語史書も散見される。残念ながら現時点では、内容と俗語使用との明確な関連性を確認することはできない。

5 俗語版歴史記述と図像

この時代に出現する俗語史書には、また同時に数多くの挿絵も確認される。13世紀前半段階までの装飾写本の主流は「詩編」や「聖書」であったが、世紀後半からは「物語(騎士物語)」および「史書」といった世俗的な作品でも装飾写本が現れている。他方、主として教会関係作品の挿絵を担当する者と世俗的な作品を得意とする者の分化は、14世紀後半以降であったことが指摘されている。したがって13世紀後半から14世紀前半までは、同一の挿絵画家もしくは挿絵工房が、教会と世俗、両者の写本制作に携わっていた。しかしそこには明瞭な描き分けが認められ、「詩編」や「聖書」においてパターン化された場面が繰り返されるのに対し、「物語」や「史書」では、はじめてその内容に触れる読者の理解を助けるために、一章の内容を要約するような挿絵が章の冒頭に置かれる場合や、章冒頭の装飾文字の中を分割して挿絵を描写するなど、分割や拡大を組み合わせた、多彩な試みが知られている。さらに、世俗的作品のなかでも、「物語」と「史書」とでは同じ出来事（例えば、王朝起源神話となるトロイア戦争）を挿絵で表現する際に方向性の違いが見受けられる。「史書」の挿絵は、たとえば君主像、王国像に関して、ときとしてテキスト以上に顕著な政治的メッセージを含んでいる場合もある。

6 おわりに

このように、法実務の場にあっても、また歴史記述においても、王権の拡大とフランス語の浸透は一致していなかった。両者は一体的ではなく、それぞれ独自の展開（成長、拡大、衰退）を見せている。俗語としてのフランス語は、様々な地域的偏差を含んだまま、漸次的に普及しており、各地でコミュニケーション言語としての機能を強化していくなかでその影響力を拡大させていた。王権によるフランス語の活用は、むしろそういった状況に突き動かされる形で進んでいったと考えられる。

したがって、『王の物語』に象徴される、歴史叙述における俗語使用の意味についても、通説的理解とはやや異なった観点から考えてみる必要があるように思われる。王の命を受け、当時まだ「王の言葉」ではなかった俗語フランス語を用いて、普遍年代記の枠組みのなかで王朝史を軸に独自の記述を加えていったサン＝ドニの活動は、第一には、先進的に俗語を用いていた北フランス中小諸侯・諸都市と王権との関係性のなかで理解されるべきであり、第二には、史書編纂が必ずしも活発とはいえない状況のなかで、カペー期からヴァロワ期へと続くその一貫性・継続性において評価されるべきであろう。